

B I

368



和漢  
身書



東京師範大學教授村真顯

文部大書記官辻新次  
東京大學教授村真顯  
東京師範大學教授稻垣正健  
竹溪山内貴先生編纂

# 和漢

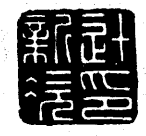
類屬冊函行級  
脩 拾 四  
段 志 一

# 身書

文學社發兌

法政五年十月

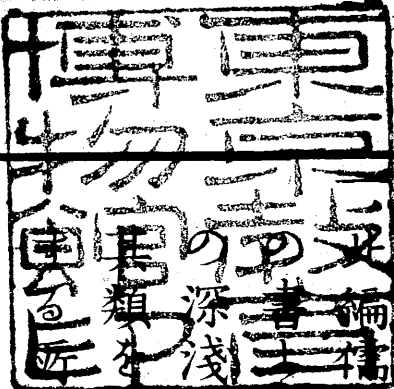
任君



看書如服藥藥多  
力自行養蒙之道  
先入之言以為主可  
不慎乎

右何子元語書之  
以代題詞

中村敬宇



明治十六年三月三日納付士林義塾

道主義に基き和漢の經史及諸子百家  
り先聖故賢の格言訓語を摘録し理義  
の深淺と章句の難易とに因りて序次を定め  
以て是か節目を別たす蓋文部省頒布  
の小學校教則綱領の主旨に據る

一 輯録する所の格言訓語其出典を掲るを例と  
す然れども其姓名を記すもの及諸書より抄  
録するものは亦此例に依らす  
一 漢土の書より摘録するものは務て我 國體

に適し風俗に稱ふものを採る故彼已を潔くして君を愛せざるもの迂遠にして人情に近からざるもの如きは皆之を採ざるなり  
一此編卷一より卷五に至るを初等科の課本とす正體の假字に漢字を雜ゆ卷六より卷十一に至るを中等科とす變體の假字或は片假名に漢字を雜ゆ卷十二より卷十五に至るを高等科とす片假名に漢字を雜へ或は全く漢文を載す亦以て綱領讀書科の順序に従ふなり

明治十五年十月

編者識

# 和漢修身書卷之一

稻垣千穎閱正

山内 賁編纂

## 第一章

○人の行は、身を修むるを本とす

○身を修は、行儀を正しくするをいふ、

○身を修むるは、孝悌の本なり、

○能く父母に事ふる、これ

れを孝といふ

○能く父母に事ふとは、顔色を和けて之に順ふなり、

○能く兄弟を敬ふ、これを悌といふ、

○兄弟を敬ふとは、  
之を大切にするなり、  
○能く弟妹を愛するこ  
れを友といふ、  
○人の行は、孝より大  
なるはなし、

○悌は、孝に次ぎたる  
善き道なり、  
○友は、悌に次ぎたる  
善き道なり、  
○父母の恩は、山より  
も高く、海よりも深し、

○父母より事を命せ  
られは、速に之をす  
一、  
○孝子は、天の恵を受  
け、不悌の人は、天の咎  
を蒙る。

○我が父母を敬せは、  
人の父母をも敬せよ、  
○人の親を敬すれば、  
人も亦我が親を敬す、  
○父母に對するには、  
從順を第一とす。



○從順とは、父母の命に背かざるをいふ、  
○精良なる物は、これを親に奉り、粗惡なるものは、自用するべし、  
○朝夕の定省を怠ら

し、冬は、温にして、夏は、清ふすべし、  
○父母、我を愛すれば、喜ひて、忘るべからず、  
○父母、我を惡めば、畏れて、怨むること勿れ、

○財多ければ、いよく、  
父母に、厚ふす一、  
○衣服の料は、柔なる  
を擇み、飲食は、美味を  
薦む一、  
○父母病あれば、速に、

良醫の治療を請ふ一、  
○父母病有る時は、晝  
夜其の傍を離れず、看  
護す一、  
○人に笑ひ辱めらる

ことゝを爲るは、不孝なり、

○己より年長せる人を、は、總て之を敬ふべし、  
○我より年少き者を

は、皆之を愛すべし、  
○學齡に至りて小學校に入るは、國人の務なり、  
○學ぶ時は人に尊ま

○學はされは鳥獸に  
かす、  
○學校に入らば、行狀  
を正しく、科業を勤む  
一、  
○學問は、勉強の力に

よりて成る、  
○事は、怠惰より敗る、  
○朝は、早く起きて學  
問す、  
○夜は、寝る時に至り  
て眠る、

○出づるには、必父母に告げよ、  
 ○歸る時も、必父母に報すべし、  
 ○戸障子の開闔を静にすべし、

○書籍石板等は、大切に取扱ふべし、  
 ○筆墨などを人と交換すべからず、  
 ○障子壁等に、濫書することなかれ、

和漢傳書卷之十一  
○遊戯する時、衣物を、  
汚さぬ様に、すへへ、  
○惡しき遊を、爲るこ  
と勿れ、  
○戯にても、人の物を、  
かくすへからず、

○善き友に睦しくす  
へへ、  
○惡しき友には交る  
へからず、  
○人と交るには、信實  
を本とす、

○一旦約したる事は、  
必踐み行ふべし、  
○虚言を以て人を欺  
くこと勿れ、  
○朋友の善きことは、  
之にならべ、

○我が身の能に誇るべ  
からず、  
○人の短所を笑ふこと  
勿れ、  
○人を笑へば、人も亦  
我を笑ふ、

○人は我を嘲るとも、  
我は之を復すべから  
す、

○禍は悪しき友より  
起り、福は良き友より  
生す、

○人の能くするを、嫉  
むこと勿れ、

○人の能くせざるを、  
形はすこと勿れ、

○富ては、貧しき者を  
忘るべからず、



○貴くしては、賤しき  
者を侮るゝからず、  
○人は、禮義なくはあ  
るゝからず、  
○禮あるを貴き人と  
いひ、

○禮なきを賤しき人  
といふ、  
○善に習へば日々に  
樂しく、  
○惡に倣へば日々に  
苦しむ、

○火を弄ふこと勿れ、  
過ては家を焼く、  
○石をおけうつこと  
勿れ、誤ては人を傷る、  
○過食すれば病を發  
す、

○運動せすては健康  
に害あり、  
○不潔の水を飲む  
からず、  
○不熟の果を食ふ  
からず、

○他人の物を羨むことなかれ、  
 ○無用の品を愛することなかれ、  
 ○行くに走るべからず、躓くべし、

○立つに片足た立ちすべからず、休るべし、  
 ○師の教に従ひ、親の訓に順へ、  
 ○覺惡しとて、倦むことなかれ、

和漢修身書卷之一  
十五  
○倦ますして勉強せ  
は、竟に悟る一、  
○一時に多く覺るん  
と爲るときは、却りて  
忘れ易し、  
○忘れ易きは學はさ

ると同じ、

和漢修身書卷之一  
終





和漢脩身書

山内賁編纂

二